３.教会音楽科講師陣の紹介

- グループで学ぶ
  - グレゴリオ聖歌
  - 合唱・合唱指揮
  - 教会音楽史
  - ソルミゼーション
  - 典礼を実践する
- 特別授業
  - シスター岡立子先生
  - 田中裕先生　他
- テーマ
  - 典礼学
  - その時のトピック
- 個人レッスン
  - 声楽
  - オルガン
  - 和声
  - 通奏低音
  - 即興演奏
- 発表会
  - 合唱、オルガン、独唱
  - 演奏会（現役生：5月下旬）
  - 修了演奏会（卒業生：6月下旬）

主任・グレゴリオ聖歌

橋本 周子
Chikako HASHIMOTO

●プロフィール紹介

ドイツ国立ケルン音楽大学宗教音楽科カトリック科で学ぶ。ラインランド州コンセルヴァトワール声楽科卒業。B. ドーレにオルガン、E.ルッケンバッハに発声法、R.ヤコブスにバロック歌唱、A.ボーネにチェンバロを師事。L.アグストニにセミオロジー（古楽譜記号解読解釈」の手ほどきを受け，その後Ｊベルヒマンの連続講習会を受講，1990年来Ｇ・ヨッピヒのもとで研鑽を積み今日にいたる。グレゴリオ聖歌のＣＤリリースを連続して行っている他、2003年から20年間、毎週日本ＦＥＢＣから「神からのメッセージ・グレゴリオ聖歌」の放送を行った。グレゴリオ聖歌の表現と合唱指導（時に宗教曲の典礼との関わりおける解釈演奏）による後輩の指導に力を注いでいる。聖グレゴリオの家宗教音楽研究所所長

●講義（実技）要項

教会音楽科ではグレゴリオ聖歌は必須科目です。グレゴリオ聖歌はヨーロッパ音楽の源泉と云われているもので、人類が到達し得た最高の単旋律音楽と云われています。

しかし、忘れてはならないのは、この音楽が修道院において、修道僧たちの祈りから生まれてきたものであることにあります。グレゴリオの家の授業では、四線譜に四角い音符で記されている従来の譜面でグレゴリオ聖歌を学ぶのではなく、その上下に付されている記号、つまりネウマ譜を読み取りながら表現と聖書の意味を、教会暦を学んでいます。

グレゴリオ聖歌のテキストは聖書のことばです。ネウマ譜を読み取ることによって当時の修道院でどの様に聖書のことばを受け止め表現していたのか読み取ることが出来ます。そのことはセミオロジー《古記譜法解釈演奏法）と云われています。聖書、すなわち神のみことばをどのように表現したのか、言い換えればどの様に響かせたのかを窺い知ることが出来るのです。また学ぶ人にとっては信仰生活指針にもなるものです。現在ヨーロッパではネウマ譜を読み取りながら歌うことはごく普通となりました。あえてセミオロジーとは云わなくなりました。典礼に欠かすことのできないこの聖歌は音楽と云うよりむしろ“ことばの芸術”と云うことができます。グレゴリオ聖歌をこの点で学ぶことは他の音楽の勉強にもおおいに役立つことになります。

教会音楽科では1年生から3年生まで一緒に勉強いたします。3年間はテオリー（理論）を学ぶことより、ネウマ譜をみながら沢山歌うことを中心にしております。

専攻科では掘り下げてネウマを読み取ることを学びます。

声楽

木島 千夏
Chinatsu KIJIMA

●プロフィール紹介

国立音楽大学教育音楽学科卒業後、同大学音楽研究所の研究員としてバロック歌唱の研究と演奏活動に従事し数々のバロック・オペラやコンサートを行う。松尾道子、川口絹代、橋本周子に師事。

1992～1995年、英国のギルドホール音楽院へ留学、J.Cashに声楽を師事、E.Kirkby、D.Roblou、N.Northらのレッスンを受ける。第30回ブルージュ国際古楽コンクールにて4位入賞。翌年同音楽祭に招待され、モーツァルトの「聖墓の音楽」のソロ等を歌う。

2004年より横浜山手の洋館でリサイタルを毎年続けており、また2006年には没後200年記念としてG.F.ピントの作品を集めたコンサートを行うなど、バロックを専門に、グレゴリオ聖歌から現代曲まで幅広いレパートリーに取り組み演奏している。

「カペラ・グレゴリアーナ ファヴォリート」メンバーとしても活動し、2008年、2011年、2014年にヴァーツ国際グレゴリオ聖歌フェスティバルに出演。

近年はアンサンブル・レニブス、アンサンブルDDのメンバーとして声楽アンサンブルにも力を入れている

●講義（実技）要項

個人レッスンですので、初心者から経験者まで、それぞれのかたに合わせてレッスンいたします。

言葉を大切にし歌詞が伝わる自然な発声、みんなと一緒に響きを合わせて歌うことのできる歌い方を身につけることを目指します。また、聖歌隊を指導する時に役に立つ様々な発声練習方法をご紹介します。

歌のパートだけでなく、伴奏のバス声部を歌ったり和声がどうなっているかを読み取り、音楽を全体的に捉えて表現に結びつけることを学びます。

また、歌いやすい伴奏を弾くためのヒントも学習します。歌うことを学ぶことによって、オルガンや他の楽器の演奏、聖書の朗読、聖歌隊の指導にも役立つように考えています。

学習する曲の例：バロックから現代までの宗教的な歌曲（バッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディ、モーツァルト、シュッツ、シャルパンティエ、フォーレ。。。など）、グレゴリオ聖歌、讃美歌、日本の歌など。

声楽

小川 素子
Motoko OGAWA

●プロフィール紹介

武蔵野音楽大学卒業。橋本周子、佐伯真弥子、矢野絢子、マスネバ・ブレチコバの各氏に師事。ドイツ国立ケルン音楽大学、オーストリア国立モーツァルテウム音楽大学留学。『発声法』をエディット・ルッケンバッハ・ハルトマン、『オペラ』をペーター・ヴィッチ、ルドルフ・クノル、『声楽』をクルト・ヴィドマー、『オラトリオ』、『リート』をブレーダ・ツァコトニック、パウル・シルハウスキー各教授に師事。マスタークラスに於いては、ブルゲ・シュヴァルツバッハ教授、及び宮廷オペラ歌手エミー・ローゼ教授に師事、高い評価を得る。ポルトガル・ポルト市国際声楽コンクール入賞。日本人として初めて、ザルツブルク・フランチスカーナ教会専属歌手となり、又、ザルツブルク大聖堂の日本人女性初の専属歌手として、モーツァルトをはじめ、ヨーゼフ・ハイドン、ミヒャエル・ハイドン、シューベルト等の全てのミサ曲を歌い上げる。オラトリオ歌手としては、『ザルツブルク音楽祭』、『ザルツブルク国際モーツァルト週間』、『アンスバッハ・バッハ週間』等、にソリストとして多数出演。バロックから現代までの幅広いレパートリーを持ち、日本国内および、オーストリア、ドイツ、イタリア、スイス、フランスなどヨーロッパ圏を中心に、宗教曲、オペラ、コンサートのソリストとして活躍している。指導者としても、多くのソリストを指導するとともに、200名有余の女声・男声・混声合唱団から個人の規模において、歌唱指導、ヴォイストレーナーとして30年以上の研鑽を積んでいる。

近年、アジアに唯一つの国連機関の本部の、国連大学新大学院創設記念シンポジウム「サステイナビリティと平和」の記念式典において、ソリストとして式典歌を歌う栄誉を得て、絶賛を博した。日本声楽発声学会正会員。

●講義（実技）要項

≪心身ともに心地よく歌うためのヴォイストレーニングについて≫
美しく歌うための「姿勢」「心身の動き」「呼吸法」「発声法」を実践的に学びます。このヴォイストレーニングで歌いながら、自分の声の変化を実感し、「声・心・身」の真の実力を発揮し、素の自分、真の自分の声を体験します。

初心者から上級者まで（グレードは問いません。）を対象に、このメソッド（姿勢・心身の動き・呼吸法・発声法および発音の仕方に至るまで）のヴォイストレーニングと、それを更に実際の歌唱に活かす方法を様々なジャンルの曲目を通じ、実践的に歌って参ります。音楽は「音を楽しむ」、声楽は「声を楽しむ」と書きますが、この基礎から応用へのステージでは、自らの真の声を見つける事により、歌う事の楽しさ、そして喜びを知り、それを演奏表現に活かす事の出来る実践力を養います。

各自準備：動きやすい服装、筆記用具。テキストは、必要に応じて掲示します。

声楽・グレゴリオ聖歌

鈴木 菜穂子
Naoko SUZUKI

●プロフィール紹介

武蔵野音楽大学声楽科卒業。河村昭世、クリスチャン・デ・ブロイエン、村上亜紀子の各氏に師事。

東京合唱協会、日本合唱協会に所属後、聖グレゴリオの家で橋本周子氏に声楽、グレゴリオ聖歌、宗教音楽を学ぶ。カペラ・グレゴリアーナ・ファヴォリートのメンバーとして活動、2008年以降にヴァーツ国際グレゴリオ聖歌フェスティバルに参加。

現在、カトリック成城教会オルガニスト、聖歌隊指揮を担当する傍ら、数々の教会で演奏活動をおこなっている。

●講義（実技）要項

- 教会の典礼暦に沿ってミサや聖務日課で歌われる聖歌をとりあげる。
- 歌うだけではなく、聖歌の背景やネウマ記号にこめられた祈りの言葉を深く味わう。

合唱・合唱指揮

牧野 成史
Seiji MAKINO

●プロフィール紹介

宗教音楽家・オペラ歌手としてドイツ・オーストリアで20年近く活躍。武蔵野音楽大学、ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学を経てスイス・バーゼル音楽大学を首席で卒業、声楽および室内楽の国家演奏家資格を習得。声楽をクルト・ヴィドマー、エリザベート・シュヴァルツコップフ。発声法を木下武久、山田実。宗教音楽をエルンスト・ヒンライナー。モーツァルト演奏法をアントン・ダヴィードヴィッチ。指揮をヤーノシュ・ツィフラ、各氏に師事。ザルツブルグ大聖堂首席ソリストを長く勤め、ミサ曲・オラトリオに広いレパートリを持つ。オラトリオ歌手として数々の音楽祭に出演。またハンブルク国立歌劇場，南東バイエルン州立歌劇場、スイス ビール・ビエンヌ歌劇場と専属・客演契約するなど数多くのオペラに出演。1994年から指揮者活動を開始、ザルツブルグ大聖堂・同フランチスカーナ教会で多数客演し、帰邦してからは所沢・横浜両アカデミーで多くのオラトリオ・ミサ曲を演奏。

日本で知られない楽曲の紹介にも積極的で、ギルマン・オルガン協奏曲、ラインベルガー・オルガン協奏曲第1番、ミヒャエル・ハイドン・ヴァイオリン協奏曲（MH207）、ヨーゼフ・メスナーの作品群を日本初演、活動が評価され、国際ヨーゼフ・メスナー協会（奥）の特別会員に迎えられた。ウィーン古典派は得意分野であり、先日ハイドン ミサ曲全曲演奏を完了した。現在ザルツブルク フランチスカーナ教会客員指揮者、聖グレゴリオの家宗教音楽研究所講師、2017年、ポーランド・オポーレ司教管区教会音楽学校 合唱指揮科客員教授に就任した。

●講義（実技）要項

指揮はともすると自己流になり余計な動きが伴い、逆に演奏の妨げになることがあります。これを防ぐためにも基本的な技術を重視していきます。音楽を演奏する時、しっかりとした均一なテンポをキープ出来ることが必要です。音楽によってはテンポに動きがあるものがありますが、それもしっかり意識下でコントロールしなければなりません。

指揮を勉強する事は、楽器を演奏する際にも非常に有益です。授業では基本を重視しながら、それに伴う表現法をマスターしていきます。指揮者自身は音を出しませんが、ボディランゲージのように、手や体の動き、また顔の表情で音楽を作ります。指揮は如何に自分の思うことを演奏者に伝えるかが一番重要であり、この事が授業の最大の目標です。演奏者に対する接し方、小さなアンサンブルや聖歌隊などを指導する場合でも、的確な指導と演奏が出来るように授業をすすめていきます。

合唱・合唱指揮

及川 豊
Yutaka OIKAWA

●プロフィール紹介

盛岡市出身。岩手大学教育学部及び東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。声楽を佐々木正利、鈴木寛一の各氏に師事。ルネサンス・バロック時代などの宗教曲を得意とするテノール歌手であり、少人数でのアンサンブル歌手としても活躍している。これまでに、シュッツ「クリスマス物語」「マタイ受難曲」、バッハ「クリスマス・オラトリオ」「ロ短調ミサ曲」「ヨハネ受難曲（第四稿）」「マタイ受難曲（初期稿）」「マニフィカト」ほか多くの教会カンタータ、シャルパンティエ「クリスマス牧歌劇」「わが子を捧げるアブラハム」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「レクイエム」、メンデルスゾーン「パウルス」、ディストラー「コラール受難曲」「クリスマス物語」、ヘルツォーゲンベルク「受難」などの宗教曲でソリストを務める。古楽アンサンブルについて花井哲郎、R.スチュアートの各氏に影響を受けるとともに、グレゴリオ聖歌の演奏法を両氏に加え橋本周子女史とG.ヨッピヒ氏から薫陶を受ける。また2014年のシューマン「詩人の恋」全曲演奏を機に、＜シューマンに恋して＞と冠したリサイタルを2016年から定期的に続けている。

ベアータ・ムジカ・トキエンシス、聖グレゴリオの家聖歌隊「ファヴォリート」メンバー。他にヴォーカルアンサンブル・カペラ、ラ・フォンテヴェルデなど多くのアンサンブルの演奏会、録音に参加。

●講義（実技）要項

一般的な音楽教育においては近代の音楽の考え方を中心に語られることが多いと思われますが、とりわけキリスト教における音楽を学ぶ上では、グレゴリオ聖歌がどのように音楽に反映され、影響を与えたかを知ることも重要です。

この授業においては、グレゴリオ聖歌や旋法性の優位なルネサンス時代のラテン語の楽曲を主に題材として取り上げ、言葉や旋律を生かした歌い方を実際に声を合わせながら経験します。当時の古い楽譜に触れながら記譜上の初歩的な知識も学んだり、必要に応じて発音・身体についての内容も取り上げ歌唱法についての理解を深めることを大切にします。

オルガン

岩崎真実子
Mamiko IWASAKI

●プロフィール紹介

東京藝術大学音楽学部卒業。ニュー・イングランド音楽院修士課程修了。
元立教女学院オルガニスト、元国際基督教大学オルガニスト。聖グレゴリオの家宗教音楽研究所講師。聖公会神学院オルガニスト。コンサートオルガニストとして国内外で活発に活動を行なっている。一社）日本オルガニスト協会、日本オルガン研究会会長を歴任。オルガンCD「装え、愛する魂よ」「エピファニー」「主の祈り」「雲中供養菩薩」「バビロンの流れのほとりに」（レコード芸術特選盤）などを製作。

●講義（実技）要項

礼拝においてオルガン奏楽者は単に楽曲を弾きこなすだけではなく、その時にかなった曲を選択し、その時にかなった演奏が求められます。オルガンのコラール作品、自由作品をバランス良く取り入れながら個々の学生のレベルに応じてオルガン奏法の基礎、礼拝での心構え、奏楽曲の選び方、およびその演奏法を指導します。また、オルガン音楽そのものに興味がある方にも、その壮大な世界の一端を実際にオルガンを演奏することを通して学んでいただきます。毎週のレッスンに臨むためには個人での練習は必須です。良く準備をしてレッスンに望んでいただきたいと思います。限られた時間を大切に、毎回のレッスンをお互いに実りあるものにしたいと思います。必要な楽譜、教材などは個々に指定します。

オルガン・即興

ジャン＝フィリップ・メルカールト
Jean-Phillippe MERCKAERT

●プロフィール紹介

ベルギー生まれ。パリ国立高等音楽院でオルガンをオリヴィエ・ラトリー、ミシェル・ブヴァールに師事し、2005年プルミエ・プリを得て卒業。ベルギーではブリュッセルのベルギー王立音楽院にてジャン・フェラーにオルガンを師事し、2008年修士号を取得。モンス王立音楽院にてクラシック作曲法を学び、2007年修士号を取得。2007年、フライベルクにおけるジルバーマン国際オルガンコンクール第2位、2009年、ブルージュ国際古楽コンクールオルガン部門第2位受賞。

2003年から1年間札幌コンサートホールKitara専属オルガニスト、2011～14年まで所沢市民文化センター　ミューズ　ホールオルガニストを務めた。現在、東京芸術劇場オルガニスト、那須野が原ハーモニーホールオルガニスト、聖グレゴリオの家宗教音楽研究所講師、片倉キリストの教会オルガン教室講師。近年、オーケストラ曲の編曲にも力を入れており、様々な演奏会で好評を得ている。CDは「ヨハン・セバスティアン・バッハ　ライプツィヒ手稿からのコラール集（2枚組）」（スイス）、「フランク、ドビュッシー、サン＝サーンス　オルガン編曲集」（パリ）、「シャルル＝マリー・ヴィドール　オルガン交響曲　第5番」（那須野が原ハーモニーホール）をリリース。

●講義（実技）要項

このクラスでは、初心者のための即興演奏の基礎について3つの様式でレッスンを行います。

1. グレゴリオ聖歌の旋法の理解と応用。グレゴリオ聖歌をどのように伴奏するか、また前奏、間奏及び後奏のつけ方を実践で学びます。

2. コラール（ドイツ語の会衆歌）の伴奏を学ぶと共に、前後奏を様々な様式（例：フガート、ビチニウム等）で演奏するための力をつけます。

3. 近現代の様式で自由な即興を行います。ドビュッシーやメシアンの旋法及びリズムを理解し、即興演奏に応用することを試みます。またレジストレーションについても、音楽と音色の関係を意識して用いることができるよう訓練します。

受講にあたり、随時講師が課題を提示するため書籍購入の必要はありませんが、次回レッスンのための課題を必ず準備してくることが条件となります。

通奏低音

坂由理
Yuri BAN

●プロフィール紹介

東京藝術大学作曲科卒業。古楽研究会にてチェンバロ、通奏低音の研鑽を積む。作曲を石桁真礼生、チェンバロを鍋島元子の各氏に師事。04年、チェンバロのための“Prelude”により、アメリカのアリエノール作曲賞佳作受賞。06年、スペインの古楽フェスティバルFIMTEにて演奏会。チェンバロのための作品をPRB Productions から出版。初期イタリアの通奏低音に関する論文を「オルガン研究」「聖グレゴリオの家論集」などに執筆。共著、共訳書に「クレ・スタディ―音部記号の歴史とともに―」(全音楽譜)、E.バイアーノ著「チェンバロ教本」(Ut Orpheus)など。国立音楽大学研究所研究員、東京藝術大学声楽科伴奏助手を勤めたほか、愛媛大学、武蔵野音楽大学の集中講義を受け持つ。現在、東京音楽大学、二期会イタリア歌曲研究会各講師。

●講義（実技）要項

「通奏低音」とは、バロック音楽を特徴づける記譜法で、バス声部に数字を付して、和音を示します。鍵盤奏者は、歌や旋律楽器とのアンサンブルにおいて、必ずこの能力を求められますが、当時の鍵盤独奏曲を弾く際も、通奏低音に関する勉強は欠かせません。というのも、バロック時代の作曲家たちは、皆この考え方に基づいて、作品を書いたのです。19世紀ドイツの音楽学者H.リーマンは、バロック時代を「通奏低音の時代」と名づけたほどです。

この授業では、かんたんな和声のひな型を弾くことから始め、主にコラールを教材として、数字の読解に取り組みます。当時の教則本や理論書による課題もとり入れ、バロック音楽への原理的な理解を深めます。

課題は各人のレヴェルに応じて、作成しますが、以下の楽譜を手元において、授業時間外での積極的な学習を望みます。

楽理・和声（聖歌伴奏）

柿沼 唯
Yui KAKINUMA

●プロフィール紹介

東京芸術大学作曲科卒業。作曲を松村禎三、永冨正之、和声・対位法・フーガを尾高惇忠の各氏に師事。また、尺八、能楽、雅楽などの日本の伝統音楽やガムラン、インド音楽などの演奏法を学ぶ。1988年から約8年にわたり武満徹氏のアシスタントを務めた。日本交響楽振興財団第9回作曲賞入選（’86）、第3回「今日の音楽」作曲賞第2位入賞（’88）を経て、90年にスラトキン指揮セントルイス交響楽団により初演された《アリオーソ》により第1回出光音楽賞（’91）を受賞。イギリス室内管弦楽団によりロンドンで初演された《尺八、ヴァイオリンと弦楽のための「桜に寄す」》（’99）、プラハ交響楽団によりプラハで初演された《「伝説」道成寺による音詩》（’04）のほか、スロヴァキア室内合奏団、ハイドン・フィル、東京フィル、大阪シンフォニカーなど国内外から作品の委嘱を受けている。2009年には、ハイドン没後200年記念の作品委嘱プロジェクトのために世界から招かれる18人の作曲家の一人に選ばれ、アイゼンシュタットの“ハイドン・フェスティヴァル2009”において、《花月 －ハイドンの名によるエチュード》が初演された。近年はオルガン曲も数多く手がけ、《蓮花》（’06）はヨーロッパ各地および日本でたびたび演奏されている。また2010年には、サン＝ベルトラン・ド・コマンジュ（フランス）のオルガン作曲コンクールで、《巡礼の笛》がMarcelle et Robert de Lacour財団賞を受賞した。武蔵野音楽大学非常勤講師。

●講義（実技）要項

音楽を構成する音の仕組みを知り、その動かし方や響かせ方を学ぶことは、作品を演奏する上でも聖歌の伴奏や即興演奏をする上でも、大切な基礎となります。この授業では、ヨーロッパの音楽においてもっとも重要な2つの柱である和声と対位法を基礎から実践的に学ぶことにより、音楽をより深く聞く耳を養い、さらには音を自在に操ることが出来るようになることを目指します。

毎回のレッスンは、1.楽譜を書くこと、2.書かれたものを深く理解して弾くこと、3.イメージ通りの音を鍵盤上で組み立てること、を実践しながら進めてゆきます。受講される方には、楽典の基礎が身についていることを望みます。

音楽は、単に知識の積み重ねや、決まり事を守ることによってのみ実現できるものではありません。私は自分が曲を作る立場から、音楽が生まれ出る瞬間の神秘としか言いようがない体験を、受講される皆さんと分かち合いたいと思っています。

ソルミゼーション

辻 康介
Kosuke TSUJI

●プロフィール紹介

国立音楽大学楽理科卒、同音楽研究所研修科修了、ミラノ音楽院古楽科に学び、ミラノ市音楽院古楽声楽科2年専攻課程修了。声楽を牧野正人、C.カヴィーナ、R.バルコーニらに、古楽演奏理論をD.フラテッリ、指揮法基礎を杉山洋一らに師事。古式ソルミゼーション実践の指導者として各地で講座を開き、Chorus Company、日本合唱指揮者協会、日本合唱連盟、日本コダーイ協会、愛知県立芸術大学ソルフェーュ科教員研究会などに講師として招かれた。声楽家としてはモンテヴェルディ作曲「オルフェオ」のオルフェオ役、「星座へ」演者、サウンドスケープ研究の鳥越けい子とのコラボなど。CDブック「おとなのための俊太郎」をリリース。フォンス・フローリス古楽院講師。聖心女子大学グリークラブ常任指揮者。日本コダーイ協会会員。

●講義（実技）要項

目的：基礎的な音楽知識を身につけることと基礎的な課題を解決する。

歌いながら学ぶ音程と音階：実際に声を出しながら、受講者が一緒に歌いながら音程を意識的に歌う楽譜と鍵盤：鍵盤上で楽音を理論的にとらえながら楽譜システムにつなげていく。①まずはユニゾンから②ドローン上で歌う③音名とダイアトニック音階④基礎としての６音階名唱⑤ハモるということ⑥音部記号と楽譜⑦７音階の階名唱⑧協和音と不協和音⑨シャープとフラットの役割と意味⑩ 旋法と調性の基本的な考え方これらのテーマとその順番を授業全体の目安とする一方で、受講生個々人の課題に合わせて臨機応変に対応する。

【ソルミゼーション】グイード・ダレッツォ由来のガムート組織および８教会旋法の理論的基礎と古式６音階名唱実践の基礎を学ぶ。

教会音楽史

那須 輝彦
Teruhiko NASU

●プロフィール紹介

立教大学文学部卒業。同大学院文学研究科博士前期課程修了。ケンブリッジ大学音楽学部大学院修士課程修了。音楽学専攻（15～17世紀イギリス音楽史）。皆川達夫、P. ラ・ヒュアレイに師事。青山学院大学教授（西洋音楽史）。

●講義（実技）要項

3年間（各年4回）で教会音楽史を講じます。おもに西方教会におけるカトリック教会とプロテスタント教会に着目し、各教派が各時代にどのような教会音楽を育んできたのかを概観します。毎年、第一回目には西方教会の音楽を理解する前提として不可欠であるカトリック教会の典礼とグレゴリオ聖歌を講じ、第二回目以降から各時代の音楽を紹介してゆきます。各年の内容は以下のとおりです。

- 1年目：中世ルネサンス時代の教会音楽
- 2年目：バロック時代の教会音楽
- 3年目：古典派・ロマン派・近現代の教会音楽

毎回、テキストや譜例のプリントを配付し、それにもとづく講師の解説を経て、作品を観賞してゆきます。

【参考文献】

- J. ハーパー『中世キリスト教の典礼と音楽』（教文館、2001年改訂再版）
- 金澤正剛『キリスト教音楽の歴史』（日本キリスト教団出版局、2005年）
- 金澤正剛『キリスト教と音楽　ヨーロッパ音楽の源流をたずねて』（音楽之友社、2007年）